

柳澤孝著

## 「園城寺国宝金色不動明王画像（黄不動）」に関する新知見」を読んで

高田 修

黄不動の名で知られる園城寺の「不動明王画像」（国宝）の本格的な修復が平成八年（一九九六）九月に始まり、一〇年（一九九八）四月に完了した。修復に際しては、園城寺により美術史の専門家を含めた修理委員会が組織され、柳澤孝氏も委員の一人として参加した。この間に得られた新知見をまとめた論文を準備していた柳澤氏だったが、脱稿を果たさず、一五年（二〇〇三）九月六日、急逝した。その後、遺品の中からほぼ完成された論文の本文が発見され、故人の遺志にそって本誌に掲載することになったので、発表に先立ち修理委員会委員長を務めた高田修氏に遺稿を読んでいたいただいた。柳澤説は、黄不動について従来の平安前期制作説を覆し、園城寺の開祖、智證大師円珍（八一四～八九二）により請来された唐時代の作例であるとする点が何よりも注目される。

私は、平安時代をやっているわけでもないし、だいたいインドの専門だったんだから、日本のことは必ずしもあまり詳しくない。進駐軍のときに、国宝というので専門の係官と随分一緒に見て歩いたことがありますけどね。ある程度、日本のことはやったし、論文も書いていますけど、私は特に不動

さんのことを研究したことがあるわけじゃないので……。見たのは展覧会。うるさく公開を叫ばれたものだから、公開をしたときには大抵見て回りましたけどね。その程度で、遠くから見ただけではどうってこともない。

私は幸いに修理委員会の委員長になったものだから、目の前に飾られて、その前で会議をやったというようなわけです。最初に委員会ができたときと、三年後に完成したときと、その二回だけはゆっくりと見せてもらいました。私はそんな程度で、柳澤さんの説がいいかどうか批判できるものじゃないですよ。彼女の論文と併せて、何か私から引き出すことがあるように思われたとしたら、それは無理ですからね。柳澤さんに対しては「よくやった」という言葉、一言しか言えないです。いろんな疑問に対して、新しい説を出したという点に敬服しますけど、それ以上に彼女の説が正しいとか何とかということを積極的に言うだけの知識がない。そういうことはご承知おき願いたいと思います。

中国のことを言うのはね、証明のしようがないですよ。唐時代のものがほとんどないでしょう。だから、あれが唐の物だとはつきり言える人は世界にもほとんどいないと思うんです。そういう相手ですからね。あの不動さん

を前から、後から柳澤さんがよく観察して、日本の絵描きだとあんなことは描けないはずだというふうなことを、あの中に書いていますね。そういうことで比較して言えば、それは正しいと思うんです。

黄不動は明治三十三年（一九〇〇）に国宝指定。昭和五年（一九三〇）五月三日より八日まで園城寺の結縁灌頂会が行われたのを機に、円満院で黄不動が公開された。五月四日、仏教美術社の主催する、美術史家源豊宗と田中一松による講演会が同寺で開かれた。田中の講演は加筆され、「智證大師と密教美術」として同年六月の『仏教美術』第一六冊に掲載された。この中で田中は黄不動を貞観時代の制作としながらも、唐朝の古様をよく伝える作としている。

それから、私たちの先輩で教わったのは、田中一松先生（一八九五〜一九八三）ですね。もう私も忘れちゃったけれども、黄不動については先生が何か多少書いていたと思うんだけど、どうですか。私がかすかに覚えているのは、中国の影響が大きいというか、あるいは中国の唐の画法に近いものか、ということが書いてあったように思うんだけど。あのころ私はそんなに黄不動に関心を持ってなかったんで、あまりよく読んでいませんのでね。

しかし、騒がしいことだったんですよ、公開しろと言って。そして、ときどき公開が実現しましたが、結局、公開したって細かく観察する機会を持ってないですからね。だから、柳澤さんみたいに細かく観察して、それをもう何か頭の中へ吸い付けていくような見方をして……。私ともよく展覧会に行きましたけど、その絵、平安時代の物ですけどね、同じ物を一時間以上見ていましたね。特に自分の好きな、あるいは見慣れた、あるいは注意している

絵があったときは非常に詳しくやっていましたね。もう本当、写真がなかったって、どこがどうだったということが言えるぐらいによく見てましたね。私なんか付き合っただけでいらなくなっちゃってさつさと次のほうへ回ってしまったんです。あの人はくぎ付けになったようにして、じっとしてましたね。それはどこへ行ってもそうだったんですよ。熱心な態度は今でも目に浮かびます。

従来から知られた史料だが、柳澤説は円珍自身による『些些疑文』の「一節」に大中九年冬至日、参拝道場時、奉見不動尊像、此土未有彼様、請賜一本」にあらためて注目している。折から渡唐中の円珍は、大中九年（八五五）五月、唐の都長安に達し、その年末の冬至の日、大興善寺に智慧輪阿闍梨を訪ねた。不動尊像を拝した円珍は、このような像は日本にないの、是非一本を賜わりたいと乞うた。この像こそ園城寺の黄不動であるという。

唐のものだと言わないにしても、とにかく日本人にはできないということ言ってるのじゃないですかね。その中で最後に智慧輪という坊さんとの対話があったでしょう。『些些疑文』という円珍の書いた本にありますね。これは漢文でしょう。彼女が読んだのは仮名で書いてあったもので、それを会議のときに見せてくれて、彼女がうれしそうに、ここにこう書いてあると言っていたのをいまだに忘れないんですがね。二、三人、まだほかに人がいたと思うんだけど、会議の始まる直前に私のところに近寄ってきて……。それだけしか覚えてないんですよ。

そこでは、智慧輪がそういうものを持っていて円珍に見せた、というところぐらいまでしか書いてない。その本の中には、それからどうしたかは書いて

てない。だから、状況証拠みたいなものだけど、円珍がそれを「譲ってくれ」と強く言っただけじゃなくて、結局、金を払って買ったのじゃないかと私は思うんだけど。このころの日本の坊さんたちが頂戴したというのは、だいたい金を渡しているんじゃないですか。

もうちょっと後の、あの『うごくモノ』（東京文化財研究所編『うごくモノ——「美術品」の価値形成とは何か』平凡社、二〇〇四）という本の中の、あれは宋の時代ですかね。山東省のどこか港の近くで中国の本は商売になるというわけで、それを書かせて日本人に売っておつたらしいですね、私はよく知りませんが。空海もそうだろうと思うんだけど、円珍もそういうふうだったと思います。円珍でもその他の人でも、珍しい本を請求して、その場で写すことができなかったも買ってきたのじゃないかと私は思うんだけど、そういう証拠はあまりないのかな。彼らは、大金をもらって行ったんだから、ただの往復の手間賃だけにしたとは考えられないと思うんです。

だから、持って帰りたいという物は買ったのじゃないかと思うんですよ。そして、中国のほうでは、これは日本の連中に売ったら金になるといっているので、盛んに書いて売ったのじゃないかと、あの本を読んで思ったんです。今まではそう思っていたわけじゃないですけど。

請求と言って、ああしてたくさん目録が出るほどに書いてあるのは、何かもつと具体的に買ってきたのじゃないかという疑いを持つんです。しかし、その程度ですよ。それを証拠付けるなり、何か匂わせるようなことが書いてあれば面白いんですけど。入唐八家の請求品が表になって出ていますけど、今のところ、そういうことを匂わすものはないですね。日本でもそういうことを言わないですけど、それは言ったら持って帰った人に失礼だというような意味から言わなかったのじゃないか、と私は想像するんだけどね。そんな程

度の、まあ、証拠にも何にもならんんですけどね。

黄不動の根本史料に、三善清行（八四七〜九一八）が延喜二年（九〇二）に撰述した『天台宗延曆寺座主円珍伝』（円珍伝）がある。「初承和五年（八三八）冬月。和尚昼坐禪於石龕之間也。忽有金人。現形云。汝当图画我形。懇勤帰仰。和尚問云。此化来之人。方以為誰乎。金人答云。我是金色不動明王也。我愛念法器。故常擁護汝身。汝須早究三密之微奥。為衆生之舟航。爰熟見其形。魁偉奇妙。威光熾盛。手捉刀劍。足踏虚空。於是和尚頂礼。意存之。即令画工图写其像。像今猶有之」の一節がそれである。最近の説では、黄不動の制作を天安二年（八五八）六月の円珍帰国後とするが……。

最近の説では、円珍が帰ってきてから何年かの間にあれを描いたと考えるんだと思いますがね。柳澤さんがああいうふうに言ったことから、私は、今度は逆に考えた。三善清行が円珍伝を書いていますよね。あの文を見たら、そこに、その目の前でその絵があるということを意識しながら書いた文章じゃないかと思うくらいに、うまく書いてますわね。あそこに出てくる不動さんの姿形についての書き方が目の前のように書いてる。私は、そういうふうに思いますね。

それはあり得ることだと思うんですよ。三善清行がそういう細工をして……。その後、円珍の弟子がいると書いてあるでしょう。円珍の行李の中からあの絵が出てきたかどうかは知らないですけど、想像すると、円珍が死んだ後で弟子たちが集まって、後始末をどうするかという会議をしたはずだと思うんです。その中にその絵や道具なんかがあったはずだと思うんだけど、そ

れについては触れてないでしょう。

そこに三善清行から箱口令が出て、そして全然、後へ伝えてはならない、そういうものがあつたらみんな消してしまえ、というふうにしたのではないか。そうでなければ、あの秘仏ができあがらないと思うんですけどね。まあ、これは想像で、小説家が喜びそうなことだけ。(笑)

あの会議には、速記じゃなくて筆耕後に各人全部で一緒に来て相談したという事になってるんですね。だから、会議ではいろんなことを消したり足したりすることがかなりあり得たのじゃないかと私は想像するんですけどね。しかし、こんな大事なことを証明するものが何もないのは非常に残念ですが、本当にそれこそ小説家に任せて……。

修復前の画幅の肌裏は、尊容とその周辺とに異なる染紙を打ち分けており、しかも二種類の裏打紙の境界が像の輪郭線とずれた箇所がいくつも見られ、像容が不明瞭で茫洋とした印象を与える原因となっていた。今回の修復でも二種類の裏打紙が用いられたが、その境界と像の輪郭線とが的確に重ねられたため、修復前の姿からは想像もつかないほど偉容な像容があらわれたという。また、中国最古の医学書といわれる『黄帝内経』に言及して、解剖学的な見地から黄不動の筋肉表現の正確さに注目しているのも新しい視点である。

それは確かだと思う。今度の修理で明らかになった、その点は強調したいと思う。確かに、線がずれて続かなかつたりしたところがあつたらしいんですね。それをどこだと言って、本人がおれば写真の中で指さしてもらえるのだけど、残念ながら本人がいないから……。それが極めて残念です。しか

しそれよりも、修理でああいう発見をしたというので、彼女がちょっと多く書いておるところはそのところじゃないかな。

裏箔のことも最近はやうようになったけど、前はそんなに裏箔というのを言わなかったですね。裏箔がはげてしまつておるといふような説明を彼女が書いていたけど、そういう細かいことになる、さあ、私には分からない。

お医者さんの説に従つて、教わつて書いたという。医者の説明が出てくると、あの辺はちょっと辟易してしまつて、何とも言えなくなつてしまつていう感じはありますね。しかし、正しく、ちゃんと筋を通して書いているとすれば、医者としてこういう言葉で説明できるということをはつきりと示しているのだつたら、それでいいのじゃないかしら。

昭和三七年(一九六二)三月の本誌一八七号に発表された「藤田美術館の密教両部大経感得図に就いて」が女性美術史家柳澤孝のデビュー作となつた。その後も醍醐寺五重塔壁画の調査と研究に携わるなど、仏教美術史の研究に活躍した。

黄不動のことについてほとんど書いたことがないでしょう。どこかの美術全集の解説なんかによつと書いたことしかないと思うんです。

私は、彼女自身の書いた大和の永久寺のいろんな作品については、一緒になつてかなり手伝つたこともありますけれども、最初の論文、密教の二大経感得図という、あれが彼女の出世作ですがね。それ以前には簡単な文章がちよつとあつただけで、その次にあれが出た。私が研究所に入つてからあまり日にちがたつてないころだつたと思うんだけど。それから後、永久寺から出て、あちこちに散らばつていゝものがだんだんと出てきて。永久寺は明

治維新のときの何とかいう古物の大先生がいましたね。何て言ったわけ？とにかく永久寺をつぶした人だと思っんですが、それが惜しいものだから、土地の人で手に入れて保存しておった人もいたようですがね。それをあちこち細かく調べて、彼女がそのことを書いておったのは知っていますけどね。

それで、永久寺のことをまとめて何とかしろって言うておったんですが、そのときには、もう彼女は違ったほうのことをやっておった。あちこちに散らばっていましたけど、永久寺にあったことが分かっていて資料がたくさんあったので、それは何かでやったら面白かったらと思うけれども。

まあ、あのころは私のほうの仕事に参加しているのとまとめてくれた。例えば、醍醐寺の五重塔の壁画は彼女が中心になってやったようなものですがね。私が研究所に入ってあんまりならないときだったから、そういうことができたのじゃないかと思うんです。

そういうふうには彼女の経歴を考えると、私と一緒にしたことが随分たくさんありますけれども、もう残された論文でそれを知るよりほかに……。今ではそのころのことを思い出すことは少ないですね。

遺作となった黄不動論は、この絵画を唐時代の作例であるとする点で画期的な新説となる。結論だけを見れば、従来の説と真正面から対立するだけに、発表されると各方面からさまざまな反応が出るだろう。今後この新説がどのような評価を受けるか注目される。

私は日本ではかなり反響があると思うんだけど。そうすれば、今まで黄不動について学者が想像しておっただんなんな解釈をこういうふうにするれば、全部が理解できるのじゃないか、というふうになっていくと面白いと思うんで

す。「そういうこともあり得る」というくらいで片付けられたんじゃ、ちょっと気の毒になりますね。

予測はできませんけど、あの人が書いている、ああいう見方をしている人は日本でもいないでしょう。あれが本当にそうだったかどうかを立証する材料がないですよ。どんなに似ているのか示せるものがないので、難しいですね。それは彼女、日本でも中国でも世界でも、唐の作品がもうどこにもないことは知っていますからね。だから、唐のものがあつたら、あれこれして……。これ（中国陝西省法門寺出土、智慧輪寄進の銀鍍金羯摩蓮弁文闍伽瓶）なんか、わざわざ見に行ったんですからね。そういう熱心さがあつたんです。しかし、そのうちに中国で何か新しい物が発掘されて、より近い物が出てくる可能性だってないとは言えない。もつとほかの資料が出てくるとありがたいですけど、それは望みが薄いですね。

『歴代名画記』なんかで唐のことが盛んに書いてあるのに、それを証明するものが何もない。そして、この時代のこととか人の名前が後の時代の『君台観左右帳記』なんかに引かれていてしょうね。だから、証拠が消えてしまったのにどうして証明するのだろうかと思っただけで、でもとにかく、これだけでも証拠として挙げるということは非常に有力だと思います。

その見方が、日本で描いたという全知識をはじめから自分で持ってやってくる人たちがって、公平にそれを見たから柳澤君があれだけやれたのじゃないか。そういうところに、とにかく一つの研究の方法としていい道を開いてくれたとも思います。それ以上に、私はこのほうが正しい説だと言うだけの資格がないですよ。

ないけど、あの説が説として足りないところのない、十分に論じ尽くされ

ているという気はします。それ以上は現在では望めない。だから、こういうきれいな写真があつて、それで証明できて終わり、ということじゃないですけどね。でも、そういう証明のやり方で足りないところはあちこちあると思うんだけど、それを皆補足しても彼女の説は決して不当なところがない、というふうには私は思うんですね。例えば、あの着ている衣の翻っている、ああいうところなんかを、あの時代に日本の絵描きであのくらいに描き得た人がいるかという、いないと思うんだけどね。

私は小説家みたいに思うんです。まず第一に、三善清行のあの文がくせものだと思うんです。あれがあるために、みんなそれを超えられないわけでしょう。小説だったらいろいろと書けると思うんです。実際に証明する文書がない以上は何とも言えませんよね。あの黄不動は画期的なものだと思つておつても今までだれもその点を言わなかった。というのは、田中一松氏がそう思つておつたと私は想像するんだけど。

いろいろ反響が出ると私は思うんです。そういうものを期待するよりほかないと思うけど、こういう説は成り立ち得ないなんていう反証が出るかもしれないですね。とにかく唐の資料がないですからね。しかしまあ何とか、話が華やかになれば面白いと思いますけどね。それでまたこの本（園城寺編『秘仏金色不動明王画像』朝日新聞社、二〇〇一）が一般の目に触れるようになったら、それについて書く人間がかなり出てくるんじゃないかと期待しますけどね。これだけのものは今まで出版できなかったんですからね。

いや、役に立たなくてお気の毒でした。本当にせっかく来てくれて……。

この柳澤さんの論文がとにかく何とかこれからの議論の的になることを望んでおつたんです。おつたわけですけど、そういう点では何もできないのを残念に思います。この『美術研究』が出てからのことは期待して待つてましょ

うよ。

付記

本稿は、平成一六年（二〇〇四）九月七日、鈴木廣之と津田徹英が甲府市内在住の高田修氏を訪ねて行ったインタビューに基づくものである。インタビューに際しては津田が質問を行い、インタビューのテープ起こし原稿は鈴木が整理と編集を行い、高田氏の校閲を経て本稿を作成した。